

行政調査の概要

委員会名	議会広報 常任委員会	調査期日	令和8年2月 4日～5日	調査先	新潟県燕市 新潟県新発田市
参加者	委員長 堂脇 明奈 副委員長 松川 勇治 委員 安藤 正博、深谷 勝仁、古川 達也、柏村 修吾、浜尾 一美、深谷 政憲 随 行 大峰 瞳（事務局）				

調査事項：議会広報について

【燕市の基本情報】

- (1) 市制施行 昭和29年3月31日 (2) 面積 110.81 km²
 (3) 人口 75,212人 (令和8年1月31日現在)



【視察の様子】

1 燕市の概要

平成18年3月20日に燕市、吉田町、分水町の3市町が合併して、現在の燕市が誕生した。新潟県のほぼ中央に位置し、日本有数のモノづくりのまち。スプーンやフォークの国内生産量は95%以上のシェアを誇る。北陸自動車道のインターチェンジや上越新幹線の燕三条駅があり、首都圏からのアクセスも良好である。

2 議会広報紙について

(1) 議会広報紙の概要

- ア 名称 つばめ市議会NOTEBOOK
- イ 発行回数 年4回（定例会翌月の25日）
- ※改選の年は臨時号を発行
- ウ 規格 A4版タテ型 16～20ページ
- 表紙・裏表紙カラー、中2色
- エ 編集者 議会広報等特別委員会



説明する
長井議会広報等特別委員会委員長

(2) リニューアルについて

- ア 紙面リニューアルの経緯とねらい

広く市民に読んでもらうために、「何を目指し、進めていくのか、何を伝えるのか」を明確にすることを大切にし、「おしゃれ」、「女性目線」を取り入れたツバメノート風のデ

ザインを採用した。デザインは、業務委託している会議録センターの提案の中から、委員が選定を行った。

イ リニューアル後の市民からの反応や評価

「ノートブック」という名称と表紙形態に広く関心が寄せられ、さらに裏表紙に「市民登場」を加えたことで、市民により身近になったと考える。

また、他議会からも関心が寄せられ、視察も来ている。

ウ 表紙コンセプトの選定方法

季節感のあるイラストとし、市内のイラストレーターに協力いただいていたが、その後は、高齢者施設利用者が制作した貼り絵を掲載している状況である。

エ 表紙のポイント・工夫

表紙は1番に目に入るものであるため、「ノートブック」という固定の様式の上に、季節感を持った題材を配置するようにしている。

オ わかりやすさと市民目線に関する工夫

27号から始まった「市民登場」では、委員が様々な団体や行事に出向き、取材を行っている。市民が登場することで、より身近な議会だよりにしたいとの思いからであり、「書き手」の文章とならないよう「読み手」の文章を意識している。

また、一般質問では登壇議員が原稿を作成するため、市民が読みやすく理解しやすい表現であるか等には気をつけている。

3 議会運営ルールブックについて

(1)掲載に至った背景

議会の会議は様々なルールに基づいて行われているが、市民は、そのルールをあまり知らずに傍聴している現状がある。それは市民にとって「開かれた議会」ではないと考え、議会の代表的なルールをまとめ、ホームページに掲載することで、少しでも議会に対する理解が深まるよう取り組んでいる。

4 他媒体との連携について

(1)議会だよりと議会ホームページとの連動

議会だよりの一般質問には、必ず動画配信のQRコードを掲載するほか、制度に誘導するQRコードも適宜入れている。

ホームページの「現場からお伝えします」では、議会だよりに載せきれない部分をフォローする形で、日々の議会活動等の様子を公開している。固すぎず、読みやすい内容とし、議会の活動が少しでも市民に伝わるよう、興味を持ってもらえるよう努めている。



挨拶する
堂脇委員長

5 質疑応答

Q：議会だよりの「一般質問」に掲載されている各議員の写真の、撮影方法を伺う。

A：議場内に専用のカメラを2台設置し、リモートで事務局職員が撮影している。

Q：委員会の開催が1日に及ぶこともあるとのことだが、進め方と、議論に時間がかかる

記事はどの部分か。

A：「市民の声」や一般質問の校正など、多くの議論をしている。委員会として発行に責任を持つのは大きなことであるため、校了するまで時間を費やしている。時間を前提とせず、納得するまで話し合っているため、委員会のこれまでの伝統と、委員の熱意だと考えている。

Q：議会だより裏表紙の、市民アンケートの内容と回答結果を伺う。

A：議会だよりを見ている頻度や評価等の設問と、自由記載欄がある。30～40代からの評価が比較的高めである。

若い方ほど、そもそも議会に関心がないという課題があると感じている。

Q：議会だよりの、各施設に配布している分の残部数を把握しているか。

A：市広報と配架は同じ箇所だが、部数はやや少ない。残部数については把握していない。

Q：SNS等他媒体の利用状況や、今後の検討予定があるか伺う。

A：他媒体については、議会だよりの最終ページにマチイロのQRコードを載せて誘導を図っているが、SNSの検討は行っていない。



【表紙】



【一般質問・議会の見える化】

【各委員の所感】

○堂脇 明奈 委員長

燕市では、株式会社「会議録センター」で研修を受け、議会だよりの作成や記事のまとめ方などについて提案をもらい、分かりやすく見やすい紙面づくりを行っている。

表紙については、一見して「議会だより」と分からないような表紙で、市民が「なんだろう」と思って手に取ってもらえる、手に取りたくくなるようなデザインにすることを念頭に置き工夫をしている。現在は、「つばめ市議会ノートブック」と名付けて大学ノートの表紙のようなデザインを施している。

紙面については、表紙の次ページをめくると、同じテーマの内容を2ページにわたって掲載し、次のページも開いて読みたくなるような紙面づくりとなっている。さらに、QRコードを適宜入れ、市の制度などのホームページへつながるようにしている。このQRコードの使い方は、本市においても活用していきたいと感じた。紙面だけではどうしても伝えきれない内容を、QRコードを活用することで、市民にとっても詳しく分かりやすいものとなると考える。

一般質問のページでは、写真については臨場感のある顔写真へと変更し、賛否の討論を記載するなど、「見る・読む」ことを追求して変更を行っている。特に、各議員の一般質問の目次をつくり、市民の興味関心を引くような見出しづくりをしていたところがとても印象的である。読みやすくするという点では、市民が理解しやすい表現に気を付けているとともに、市民が登場するページは特に話し言葉を基本とし、「書き手の文章」とならないように工夫している。

本市においても、表紙のリニューアルを目指しており、とても参考となるが多かった。今後、若い方にも「まずは手に取ってもらえる」表紙の作成をしていくこと、紙面内容については、QRコードの活用も有効に取り入れ、堅苦しさを抑えた親しみやすい内容にしていくことを大切にしながら、議会だよりの作成をしていきたい。

○松川 勇治 副委員長

燕市の議会広報紙は「読みやすく、わかりやすく、親しみやすい議会だよりを！」がコンセプトにある。

まず、表紙が目を引き作りになっていて、全世代にアプローチした、親しみやすい表紙である。次に、手に取った時の紙質にもこだわっていて、サラサラとした手触りはページをめくりたくなる。

また、表紙の左下に配置された次ページへの誘導はとても効果的であり、読み手に立ったデザインでもある。平成18年の第1号からはじまり、平成24年の第26号で大きく表紙がリニューアルされ、令和3年の第65号からは、さらに大きく変更になり、イラストも交えた、とても市民に愛された構成になっていることがわかる。紙面の内容も「一般質問の大見出し」や裏表紙の「議会がもっと近くなる 市民の声」においては、本市の議会だよりでも積極的に取り入れていくべき内容である。

手に取ってもらおう「議会だより」にするため、まずは議会だよりの愛称とコンセプトに沿ったキャッチコピーを積極的に採用した「表紙」をリニューアルすることから始めることが必要である。

○安藤 正博 委員

20年前から4回リニューアルしている経緯とねらいは、26号から「つばめ市議会ノートブック」の名称に、委員多数意見で選定された。表紙はとにかく1番目に入るものであり、季節感を持ったイラストになっていた。市民から斬新との声が聞こえているとのこと。分かりやすさ、市民目線の工夫をしてるのは、フォントの統一、行間、段組など色々行っているとのことであった。

また、平成24年8月から「市民登場」を始め、市民に大変喜んでもらえているとのこと。多くの市民に手に取って見てもらう為に、議会広報委員の皆さんが議会の活動を少しでも多くの市民に伝わるよう心がけていることが分かった。

○深谷 勝仁 委員

燕市議会では、「読みやすく、わかりやすく、親しみやすい」議会だよりを目指し、名称や表紙を大胆に見直してきたことが印象に残った。特に「議会だより」という言葉だけでは堅い印象を与えてしまうとの考えから、「つばめ市議会ノートブック」という名称に変更し、表紙も“ノート風”のデザインにするなど、まずは手に取ってもらう工夫を重ねてきた。表紙と裏表紙をカラーにし、動きのある写真や季節感あるイラストを使うことで、堅い印象をやわらげている点も参考になった。

また、一般質問では写真を大きく使い、問答の見出しを工夫するなど、「伝わる」紙面づくりを意識していることが伝わってきた。本市においても実施しているが、QRコードを活用してホームページや動画へ誘導するなど、紙とデジタルをつなぐ取り組みも進められている。

須賀川市においても、現在、表紙や名称の見直しを検討しているが、「まず手に取ってもらう」という視点は極めて重要であると感じた。堅い印象をやわらげる名称の工夫、統一感のあるデザイン、そして市民が登場する紙面づくりなどを取り入れることで、多世代に届く広報へと発展させていきたい。

○古川 達也 委員

今回の行政視察では、燕市議会が発行する議会だより「ノートブック」の編集方針や広報の工夫について学ぶことができた。特に印象的であったのは、表紙を「市民の目に最初に入る入口」と位置付け、季節感のあるイラストを活用するなど、手に取ってもらうための視覚的工夫を重視している点である。

また、ユニバーサルフォントの採用や見開きレイアウトへの変更など、読みやすさを意識した細かな改善を積み重ねていることから、議会広報に対する継続的な意識改革がうかがえた。

さらに、「市民登場」企画など、市民が紙面に参加する仕組みを取り入れることで、議会だよりを身近に感じてもらうとする姿勢は大変参考となった。

一方で、記事内容が定型化しやすいという課題や、若い世代への訴求について委員会内でも議論の必要性が認識されている点は、多くの議会に共通する課題であると感じた。議会広報は単なる議事報告ではなく、市民との双方向のコミュニケーションツールであるという視点を持ち続けることが重要である。

また、QRコードを活用した動画配信との連携やホームページとの役割分担など、紙媒体とデジタル媒体を組み合わせた情報発信は、今後ますます必要になる取り組みであると実感した。町内会配布を基本としながらも配布方法の変化に対応している点も参考となる。

今回の視察を通じ、読みやすさやデザイン性だけでなく、編集主体としての議会の責任と主体性をいかに高めるかが重要だと考えると同時に、本市においても市民目線に立ったわかりやすい議会広報の在り方について、より積極的な議論と改善を進めていく必要があると感じた。

○柏村 修吾 委員

広報紙のコンセプトとして、「読みやすく」「わかりやすく」「親しみやすい」議会だより「手に取って見たくなる」特集記事の掲載や誌面構成等を心がけている。

平成18年合併により第1号が発行され平成24年26号「つばめ市議会ノートブック」の現状に至る形式まで様々な試行錯誤し作り上げてきた事を説明された。

今日作成するにあたり、委員会～議会事務局～会議録センター（委託先）と本市ではないシステムで分担作業を明確化し、効率的に行っている。時には市長を交え「議会広報等特別委員会」を開催し、内容について議論をし、より良い「議会だより」を作成している。

また、65号には「おしゃれ」「女性目線」とした「ツバメノート風デザイン」も作られた。

今後の検討課題として、本市同様に時代にあった情報発信・タブレット・スマホ等に対応出来るように改修を図り、紙から電子化を目標としている。

広報紙の配布方法は、基本的に自治会を通じて全戸配布している。

委員長の熱のこもった説明により予定時刻を過ぎ、思い入れが感じられた。

○浜尾 一美 委員

本市で取り組んでいる、議会広報紙の手に取ってもらいやすい紙面のリニューアルに向けた協議の中で、燕市の取り組みで気になった3つの点について考えたいと思う。

まず、1つ目は、「つばめ市議会 NOTEBOOK」やはり表紙の斬新さ、学習ノートをイメージさせるようなデザインであり、各号とも、その季節やテーマに合わせたイラスト等が使用されているため、大変手に取ってもらいやすいデザインではないだろうか。イラストは、イラストレーターの方の協力でおこなってイラストを選定していたことが、現在当市で編集作業をする議員としては、少し物足りなさを感じた。

2つ目に、印刷価格。燕市の人口は、約74,000人と当市と比べてもそんなに差がないが、発行部数は、29,000部と当市と比べると5,000部以上も多い。全戸配布を行っていることも要因の一つである。表裏カラーで、中は2色。頁数は、18ページで、頁当たり1.88円税別。1号当たり33.84円税別の価格になる。内容を見ても2色だからといって、読みづらいとは感じられない。当委員会としても決められた予算内で、見やすく、読みやすさを追求するために、全面カラーの良さをもっと研究していかなければならないと感じた。

3つ目は、一般質問での議員写真の迫力。議場に2台のカメラを設置し、事務局がタイミングを見てシャッターをリモートで操作。かなりの写真の中から選んで決めるという。当市においては、このような取組は難しいと思うが、今後は、正面の写真だけでなく様々な選択肢があってもよいと強く感じた。

最後に、裏面にあるアンケートについて、83号より始まったようだが、まだ内容についても確認がされていなかったのは残念だったが、デザインについては、若い世代に受け入れられているということが分かって良かった。方向性を確認するには、良いツールとなるのではないか。

○深谷 政憲 委員

当委員会で検討を進めている「議会だより」表紙リニューアルの参考とするため、斬新な表紙を採用している燕市議会を訪問し、調査を行った。表紙には「季節をテーマとしたイラスト」、そして「ノートブック」という名称が使われている。きっかけは、他市町村議会への調査研修と委託先の(株)会議録センター依頼した研修で、写真・見出し・本文・空間「空きスペース」といった編集の基本を学び、市民に広く読んでもらうためには「議会が、何を目指し推進していくのか」を明確にする必要の気付きが、リニューアルのきっかけとなったこと。

実際に、議会だよりが大きく変わったのが平成24年(第26号)からで、それまでの「堅

い、難しい」印象を変える必要を感じていたこともあって、目新しさやインパクトから「なんだろう」と手に取ってもらえる、取りたくなるデザインを軸として検討を重ね、誰からも親しみが感じられる、好き嫌いが少ないものとの意図から、ノート案が選定され「つばめ市議会ノートブック」に決定したとのこと。「ノートブック」いう名称と表紙デザインは市民からも関心が寄せられ、紙面全体の見直しと合わせ裏表紙に「市民登場」を加えたことにより、市民にも身近なものになったと自己評価がされている。

最後に、「定式化にとどまらず変化を迫及して行くことを意識しているつもりです」との言葉に感銘を受けた。



【燕市役所での集合写真】

調査事項： 議会広報について

【新発田市の基本情報】

- (1) 市制施行 昭和 22 年 1 月 (2) 面積 533.07 km²
(3) 人口 89,074 人 (令和 8 年 1 月末現在)

1 新発田市の概要

平成 17 年 5 月 1 日に新発田市、紫雲寺町、加治川村と合併し、現在の新発田市となった。北西には美しい海岸があり、山岳地帯には磐梯朝日国立公園や胎内二王子県立自然公園など、豊かな自然景観に恵まれているほか、国の重要文化財となっている新発田城などの文化遺産を随所にとどめている。



【視察の様子】



挨拶する
湯浅新発田市議会議長

2 議会広報紙について

(1) 議会広報紙の概要

- ア 名称 ヨミネス しばた議会だより
イ 発行回数 年 4 回
ウ 規格 A 4 版タテ型 14～20 ページ
エ 編集者 広報広聴委員会
オ 配布方法 町内会に業務委託を行い、原則全戸配布（町内会未加入世帯含む）。

(2) リニューアルについて

ア リニューアルの経緯

議会運営委員会において、平成 30 年にリニューアルの検討を開始。行政視察等を経て、正式な委員会立ち上げについて提案し、令和 4 年に広報広聴委員会を設置した。

イ リニューアル後の市民からの反応や評価

議会報告会の参加者アンケートでは、リニューアル後の方が議会だよりを見る割合が増加しており、市民からも好評を得ている。市の広報紙と綴じ方が逆であることについては、苦言をいただくことがある。

ウ 表紙コンセプトの選定方法

市内の高校・大学に議員が取材に行って写真を撮り、内容を裏表紙に載せるとしていた。特集が 2 つあった時期もあるが、現在は表紙を特集に関連した写真とした。現在は、議会に関連する特集が多いので、写真やイラストが多くなっている。

エ 特集記事を掲載することとした経緯

市民に密着したテーマを特集することで、手に取ってもらい、読んでもらえる広報紙を目指している。

オ 一般質問ページにおける写真、イラストの取り決め等

議員の顔写真は、原則HPに掲載しているものだが、議員から提供があった場合はその写真を使用。質問に関連したものは、議員が撮った写真やイラストがあれば、そちらを使用する（著作権の確認は議員が行う）。無料イラストは、事務局がサイト等から探して入れている。

3 FMラジオについて

(1)市民へのメリット

FMラジオはインターネットを利用していない若者や高齢者を含む幅広い世代が聴取できる。中でも、サイマルラジオは場所を問わず、パソコンやスマートフォンで手軽に聴取できる。

(2)聴取状況について

サイマルラジオ放送については、最近では令和7年12月定例会一般質問の録音放送の時間帯で、平均40人程度の聴取があったことを把握している。

(3)放送内容と議会だより、議会ホームページとの違い

FMでは、令和6年度から一般・代表質問を後日、録音放送している。議会だよりでは、一般質問の概要を議員が原稿作成し、広報広聴委員会で校正したものを掲載している。議会ホームページでは、すべて生中継し、後日録画配信を行っている。



挨拶する
松川副委員長



【表紙】



【一般質問・議会報告会】



4 質疑応答

Q：議会だよりの変更については、都度議会運営委員会に諮っているのか。

A：ある程度は委員会に委ねられているが、大きな変更については議会運営委員会に諮ることとしている。

Q：年齢層のターゲットはあるか。

A：読者は高齢者が多いが、幅広い世代の方に手に取ってもらいたいと思っており、具体的なターゲットは設定していない。

Q：FMの利用に関しての予算はあるか。

A：FMに関して、議会では予算計上しておらず、執行部側で全体として計上している。

Q：SNSの導入を検討しているか。

A：現在、具体的な検討は行っていない。YouTubeチャンネルを持っているが、現在はウェブ報告会のみでの利用となっており、更なる活用を考えていきたい。

Q：議会だよりのリニューアル後に、マイナスな意見はあったか。

A：縦書きから横書きに変えたことに関しては、特にマイナスの意見は寄せられなかった。市広報と議会だよりの綴じが左右で異なるため、両方見ている方からは、保存に困るとの声が小数ではあるがあった。

【各委員の所感】

○堂脇 明奈 委員長

新発田市では、市議会だよりの作成においては巻頭特集に力を入れており、その他の取り組みとしてはWeb会議、議会報告会を兼ねた市内施設バスツアーなどの多様な試みを行っている。

市議会だよりの表紙にあるタイトルの変遷を見ると、当初「市議会だより」を前面に出していたものから、現在は「ヨミネス しばた」と変え、一見して議会だよりと分ならず、市民に愛着を持たれるようにタイトルを変えていた。写真だけではなく、イラストによる表紙もあり、親しみやすさを感じる工夫がされていた。

紙面内容は、見開きページを意識した作りになっており、1ページの余白が十分に取られていて見やすくなっている。また、討論の掲載があり、議会での議論が市民に伝わるものとなっている。「市民の知りたい」ことに応える議会だよりづくりが感じられ、特集では市民の興味関心にあわせた掲載をしており、市や議会の取組を紹介し、市民や若い世代に分かりやすい言葉で表現されている。一般質問の見出しについても、堅苦しくない表現がされている。議会報告会参加者にアンケートをとった結果、リニューアル前は、議会だよりを「よく見る」が56%だったが、リニューアル後は、「よく見る」が77%となっている。議会だよりの改善の取り組みが市民に密着したものとなり、数字となって表れている。

本市においても、市民に「まずは手に取ってもらえる」ことを意識し、表紙からリニューアルを考えている。その他、タイトルの表現の仕方、具体的な掲載内容についても、見やすく分かりやすい表現方法など、一つ一つ踏み込んで検討し、市民に「次も読みたい」と思われるように議会だより作成に取り組んでいきたい。

○松川 勇治 副委員長

新発田市の広報紙で注目すべき点は、議会運営委員会との連携と協力や、議会広報委員会での積極的な議論の場の設定、その他の媒体（FM等）との連携である。

また、議会で議論されている内容について「市内施設バスツアー」を催行している点も先進的事例である。本市議会でも、新発田市議会が積極的に表紙やタイトル（愛称）を市民の目線で「手にとってもらおう」ことをコンセプトに据え、大胆にリニューアルしていることにも注目したい。

議会運営委員会での連携については、広報委員長が議会運営委員会副委員長に所属している事などもあり、とてもスムーズに広報委員会での意見を届けることができ「議会だより」にて、市民の幅広い世代にわかりやすく明確に伝えることができている。

その他の媒体（FM等）との連携は、本庁舎の1階にFMのブースが設置されていることや、市民が多く訪れる多目的スペースなどが併設されている条件もあり、市民にとって「議会」が一層身近に感じられる要因にもなっている。本市においても、市民交流センター（t e t t e）などでFM等とも連携し、市民が議会について興味を抱き、市民にとってより一層身近に感じてもらえるような取組をしていくべきである。

表紙についても、新発田市の取り組みは市民の目線に寄り添っていて、「議会だより」という文字を小さく配置し、市民にとって日常的に使われている「〇〇ネス」という親しみやすい方言を愛称に採用し、文字の色彩を「淡い桃色」にするなど、幅広い層にアプローチしているのがよくわかるデザインになっている。近年では「あやめちゃん」というイメージキャラクターも紙面に採用されるようになった。

本市の「議会だより」も、幅広い層にアプローチできるような表紙デザインを作成することから始める必要がある。

○安藤 正博 委員

議会だより「ヨミネス」のリニューアルの経緯の中で、市民からの評価アンケートでは、リニューアル前は「よく見る 56%」、「たまに見る 33%」、リニューアル後は「よく見る 77%」、「たまに見る 23%」になり、市民から好評を得ているようだが、市の広報と区別が付きにくい等の声も聞かれるとのことであった。

多くの市民に手に取って見てもらう為に、表紙についてはインパクトを与えるよう意識しているとのこと。市の広報もリニューアルの話し合いがあり、大変勉強になった。

○深谷 勝仁 委員

新発田市議会では、議会だよりを「手に取ってもらい、読んでもらえる広報紙」とすることを明確な目標に掲げ、リニューアルを進めてきた。愛称を公募し、「ヨミネスしばた」という親しみやすい名前を採用したことは、市民との距離を縮める大きな一歩であったと感じる。

紙面では、全面カラー化や横書きへの変更、文字数を減らして余白を活かす工夫など、読みやすさを徹底している。巻頭特集では、委員自らが取材・撮影を行い、市民の声・市の取組・議会の取組を分かりやすくまとめている点も特徴的である。一般質問についても文字数を制限し、要点を絞って掲載することで、読者の負担を軽くしている。

須賀川市でも、名称変更を検討しているが、単に名前を変えるだけでなく、「誰に届けたいのか」「どんな議会を伝えたいのか」という目的を明確にすることが大切だと感じた。若い世

代にも読んでもらえるよう、写真の使い方や特集の組み立て、市民参加型の企画などを取り入れ、多世代が自然と手に取る広報へと進化させていきたい。

○古川 達也 委員

今回の行政視察では、新発田市議会が発行する議会だより「ヨミネスしばた」の編集方針やリニューアルの経緯、広報改革への取り組みについて学ぶことができた。昭和61年の創刊以来、市内全世帯への配布を継続しながら、「手に取ってもらい、読んでもらえる広報誌」を目指し、全面カラー化や横書きへの変更、文字数削減による余白の活用など、大胆な紙面改革を段階的に実施してきた点が印象的であった。特に、議員自らが取材・撮影・原稿作成に関わる巻頭特集や表紙づくりは、議会主体の広報という意識を高めるとともに、市民目線を取り入れる重要な仕組みであると感じた。

また、愛称やキャラクターを公募し、親しみやすさを高める工夫や、市内の学生・若者の活動を表紙で紹介する取り組みは、市民との距離を縮める効果的な手法である。

一方で、市広報紙との違いや紙面構成への意見など、リニューアル後も改善を重ねている姿勢は、議会広報に終わりのない改革が必要であることを示している。

さらに、特集テーマを委員会で議論し、市民生活に密着した内容を選定している点は、単なる議会報告に留まらず、市民の関心を引き出すための重要な視点であると感じた。

本市においても、人口減少や情報媒体の多様化が進む中、議会だよりの役割はますます重要となる。今回の視察を通じ、議会が主体的に企画・編集に関わり、わかりやすさと親しみやすさを追求し続けることが、市民に開かれた議会を実現するための鍵であると強く認識した。今後の議会広報の改善に向け、大変有意義な視察であったと強く感じている。

○柏村 修吾 委員

広報紙創刊は昭和61年10月「新発田市議会 議会報」。現在のコンセプトは「手に取ってもらい、読んでもらえる広報誌」を目指している。

令和4年142号「ヨミネスしばた」とした。名称に関しては公募し、「ヨミ」読んで「ネス」新発田の方言でくださいとのこと。143号から、市のキャラクターとして同様に「あやめちゃん」に決まった。

議会活動として議会に興味を持ってもらおうと「議会報告会」のバスツアー等を行ったが不評で、報告よりも要望が多くなってしまった。現在では「ワークショップ」を市庁舎内で行い好評である。

今後の課題として、将来に向けて紙から電子化が目標である。

広報紙配布方法は、原則業務委託し全戸配布している。町内会加入率92%には驚きである。

○浜尾 一美 委員

新発田市の議会だよりは、「ヨミネスしばた」というネーミングの良さを持っている。令和3年7月に大幅なリニューアルがされたが、その時は、まだ「しばた」を強調した市議会だよりであったが、その年の8月に議会運営委員会にて、愛称、キャラクターの募集実施を決定して、令和4年2月に愛称「ヨミネスしばた」として発表され、現在に至る。「ネス」は、新発田地方の方言での語尾に使われるものとされており、読んでくださいという意味を持つ。議会だよりという表記はかなり小さくなっており、ヨミネスという言葉通り、手に取ってもらいやすそうな名前となっている。

紙面内容は、全面カラーであり、表紙は、特集記事に関連した写真やイラストといったものとしており、読み手にも関心を持ってもらいやすい取組となっている。そのテーマは、市民に密着したものをメインにしているようだ。レイアウトも横書きで統一されており、若い方には、特に読みやすいのではないかと感じた。

印刷価格に関しては、16 頁から 28 頁で 23 円程度～40 円程度であり、発行部数が約 37,000 部で全戸配布としていることが、単価が安い要因である。燕市の時でも述べたが、決められた予算内で、いかに見やすく、読みやすくしていくかの工夫は必要である。

また、一般質問の写真では、写真やイラストを使用しているが、議会のHPの写真や議員提供のものを使用し掲載している。掲載写真についても、様々な工夫がされており、見習えるところは見直しをしていくべきと感じた。

最後に、新発田市の委員長の見解として、広報に関してもペーパーレスを目指したいとしていたが、本市としては、紙の媒体の良さもあることから、今後も紙の媒体は残していきたい。

○深谷 政憲 委員

燕市市議会同様に、議会だよりの全面的な「リニューアル」に取り組んできた新発田市議会を訪問し、調査を行った。平成 30 年にリニューアルに着手、議会運営委員会の選抜メンバーで広報小委員会の位置付けで検討を重ね、令和 3 年 3 月に議会運営委員会にて、広報刷新への手順、草案等を提案、了承後に、同年 6 月の議会運営委員会において、正式な委員会立上げを提案（令和 4 年 3 月に広報広聴委員会が設置されるまで）、令和 3 年 7 月 30 日号からのリニューアルを決定した経緯についての説明を受けた。

リニューアル号（第 140 号）の主な変更点としては、①全面カラー、②編集等を議会運営委員会の選抜メンバーで実施、③議員が直接取材し、編集する「巻頭特集」「表紙・裏表紙」の掲載開始、④一般質問を読みやすくするための文字数削減、⑤全文を横書きとし左開きに変更、⑥閉じ穴廃止の 6 点をあげている。なお、愛称・キャラクターの公募を第 141 号（11 月 15 日発行）で行い、第 142 号で「ヨミネスしばた」に決定。「ネス」は当地新発田の方言で、語尾に付けるので「ヨミネス」は「読んでください」の意味だそうで、親しみを感じる。

新発田市の世帯数は約 37,000 で、議会だより発行部数は 37,500 部。業務委託し、町内会を通し全戸配布を行っているとのこと。アンケート調査結果（令和 7 年 6 月 26 日時点）では、回収率 78%、町内会加入率 92%と加入率は高いものの、減少傾向にあると話されていた。新発田市議会においても、まずは手にとってもらうため、インパクトを意識し、読みやすい紙面作りに取り組んでいることが感じ取れた視察となった。



【新発田市議会議場での集合写真】